

第V部

テンスとアスペクト 時 と 局面

第16章では、テンスを川の流れ、アスペクトを舟への言及点とする比喩で
テンスとアスペクトの関係を図示する。

確実性のメジャーを採用する。

「現在」をタイプ別に3種類に分ける。

複文における二つの出来事間の関係を図示する。

第17章では、テンスとアスペクトの関係を2桁数で表示する。2桁数で表
示することにより、こまごました状況説明などをしなくとも、
的確に、かつ簡単に時間的関係を示すことができる。

第16章

テンスとアスペクト

時 と 局面

16.1 テンス

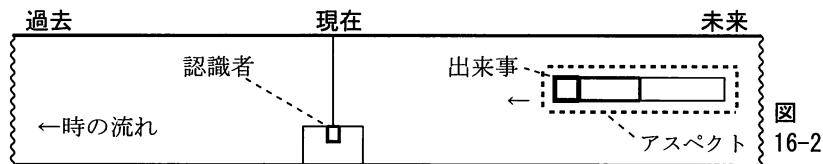
a) 川の流れ

川の水は川上から川下へと流れて行く。いま、一人の認識者が、流れに突き出した桟橋の先端に立っているものとし、川上に舟が浮かんでいるものとする。その舟は流れのままに認識者に近づいてきて、そばを通り過ぎ、川下へと運ばれて行く。(舟は浮かんでいるだけで、動力はないものとする。)



b) 時の流れ……時間の流れを川の流れにたとえる

時間は未来から過去へと流れていく。認識者は時間の流れに突き出した現在という桟橋の先端に立っている。未来の出来事は話者が川上に浮かべる予定・予想という名の舟である。その舟が時間の流れに乗って近づいて来る。出来事はアスペクト(局面)を伴っている。出来事は未来においては予定・予想でしかないが、現在という桟橋の所で現実世界に実現し、確定したものとなり、過去へ流れて歴史的事実となる。



この図にあるアスペクトの舟(出来事の舟)は、図16-3,-4 のようなしきみになっている。

「動き的出来事」のアスペクトの舟

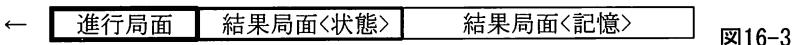


図16-3

「存在的出来事」のアスペクトの舟

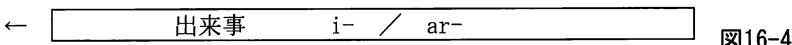


図16-4

c) 過去と非過去

認識者が未来に視線を固定していると、出来事の舟が接近してきて、やがて舟の部分部分が見えなくなっていく瞬間がある。それが未来と過去の境目であり、現在と呼ばれる瞬間である。

この境目である現在は未来と過去のどちらに属するのだろうか。「見える最後の時点」と考えれば未来に属し、「見えなくなる最初の時点」と考えれば過去に属することになる。が、「見える」というのはどういうことだろう。これは「意思によるコントロールがきく」ということと考えてよいかもしれない。「見えない」というのはすでにそのコントロールがきかなくなってしまった状態(過去)ではないだろうか。とすれば、コントロールのきく最後の時点が現在であるから、現在は未来に属するのではないだろうか。

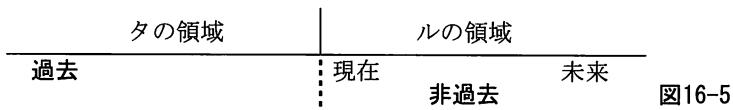
確かに、日本語では現在を未来に属するものとして扱っており、テンスを「過去／現在・未来」というふうに区分している。これを「過去／非過去」のようにいふこともある。

d) テンス……ルの領域、タの領域

現在という桟橋の上に立って未来の出来事を見ると、その舟の前部が見える。開始前の局面が見える。それは-(r)u(ル)でとらえる局面である。日本語では未来の出来事は開始前の局面「ル」でとらえる。それで、未来(したが

って非過去)のテンスは「ル」で表示されることになる。

同じく現在という桟橋の上に立って過去の出来事を見ると、その舟の後部が見える。完了後の局面が見える。それは $=t-\emptyset=a(r)-(\text{タ})$ でとらえる局面である。日本語では過去の出来事は完了後の局面「タ」でとらえる。それで、過去のテンスは「タ」で表示されることになる^{*1}。



16.2 アスペクト言及点

話者は出来事をことばで表現しようとするとき、その出来事を時の流れの上に置いて表現することがある^{*2}。その場合、出来事をひとまとめにして、単なる未来、単なる過去として扱うこともあるが、また、出来事のどこかの局面を選んで、そこに言及することによって出来事を表現しようすることもある。

後者の場合、ある局面が話者によって選ばれる。この選ばれる局面を「アスペクト言及点」あるいは単に「言及点」と呼ぶことにする。「言及点」とはいっても、もちろん点であるにとどまらず、時間的幅をもつこともある。

アスペクト言及点は話者が出来事の写真を撮ろうとするときに設定する焦点(フォーカス)によく似ている。話者はその焦点(言及点)に向かってカメラを構える。

言及点は次のように基本的に7つある。(ただし、『発展A』A4.4において

*1 ここから、日本語ではテンスを立てる必要がないとの議論も生じ得るが、出来事は時間の中で生起しているのだから、やはり、テンスとの関連においてとらえた方がよりよい理解につながるだろう。

*2 出来事を時の流れの上でなく、観念の「土手」の上に置けば、それは出来事を一般的・普遍的・概念的なものとして表現することになる(13.4 後部参照)。

ては言及点1を後ろからとらえる言及点7を設定している。)

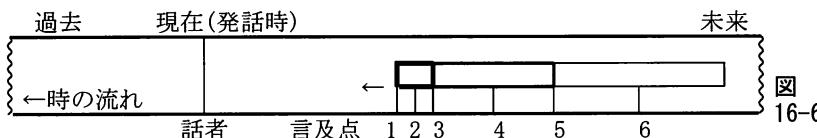
- | | | |
|---|-----------------|---------------|
| 1 | 開始(前)……………言及点1 | (後…言及点7)A4. 4 |
| 2 | 進行中……………言及点2 | |
| 3 | 完了(後) | } ……言及点3 |
| 4 | 進行完了(後) | |
| 5 | 結果状態継続……………言及点4 | |
| 6 | 結果状態完了(後)……言及点5 | |
| 7 | 結果記憶継続……………言及点6 | |

言及点に関する言語表現は、出来事が未来から過去へと流れていくにつれて変化する。テンスの流れの上にある各言及点で、どのような言語形式が使用されるのかを見ておきたい。(話者の発話時点が現在である。16.5参照)

ここでは時の流れに乗せる舟を2そう選ぶ。④「短い出来事」(動き的出来事の代表として)の舟と、⑦「存在的出来事」の舟である(13.6, 7参照)。

16.3 ④「短い出来事」のテンスとアスペクト

a) 未来……出来事が未来に予定されている場合



言及点1 (未来開始)

(12時に) 着物を着ル

言及点2 (未来進行)

(12時15分ごろ) 着物を着テイル

◎局面としてではなく、出来事の成立そのものとして表現する場合

→ (単なる未来) (12時に) 着物を着ル

言及点3 (未来完了)

(未来の完了は表現できない*)。)

*1 連体、仮想の場合には相対テンスとなるので可能になる(A9章、A10章)。連体は、例えば 16.7 b) 参照。仮想は条件表現がある……「着物を着たら(未来完了・条件)写真を撮ろう」「そのときまで着物を着ていたら(未来結果状態完了・条件)、すぐにシャワーを浴びなさい」

言及点3 (未来進行完了) (未来の完了は表現できない^{*1}。)

言及点4 (未来結果状態継続) (午後は) 着物を着テイル

言及点5 (未来結果状態完了) (未来の完了は表現できない^{*1}。)

言及点6 (未来結果記憶) (当日で5回) 着物を着テイル

b) 現在……出来事が現在の場合

話者の位置と言及点の位置が一致する。



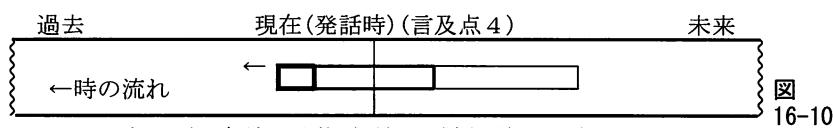
言及点1 (現在開始)
(直近未来・直近過去) (今) 着物を着ル
あ、着物を着タ (言及点7…A4.4)



言及点2 (現在進行) (今) 着物を着テイル

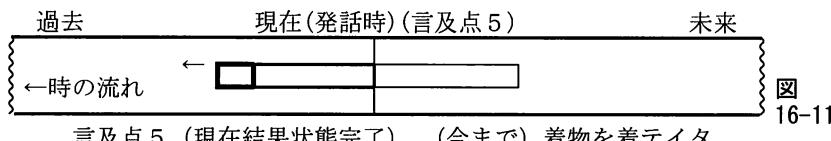


言及点3 (現在完了) (今) 着物を着タ
言及点3 (現在進行完了) (今まで) 着物を着ティタ



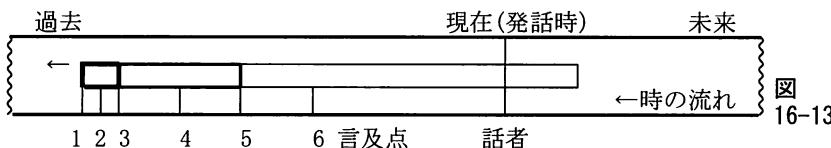
言及点4 (現在結果状態継続) (今) 着物を着テイル

*1 16.3 a)注 参照。



非過去である未来と現在は基本的に同じ形式をとっている。しかし、未来は現在と異なり、発話時点から完了を見ることができない、表現できない。

c) 過去……出来事が過去となった場合



言及点 1 (過去開始) (過去の開始は表現できない*1。)

言及点 2 (過去進行) (7時45分ごろ) 着物を着テイタ

◎局面としてではなく、出来事の成立そのものとして表現する場合
→ (単なる過去) (7時半に) 着物を着タ

言及点 3 (過去完了) (8時に) 着物を着タ

言及点 3 (過去進行完了) (8時まで) 着物を着テイタ

言及点 4 (過去結果状態継続) (午前中は) 着物を着テイタ

言及点 5 (過去結果状態完了) (正午まで) 着物を着テイタ

言及点 6 (過去結果記憶) (当日で5回) 着物を着テイタ

*1 16.3 a)注 参照。仮想は「着物を着るなら(過去開始)、シャワーを浴びればよかつたのに」／舟の前は後ろからは見えない。 A9章, A10章参照。

以上、「短い出来事」ではテンスとアスペクトの関わりを4つの言語形式が分担していることがよく分かる。出現回数を数えてみる。

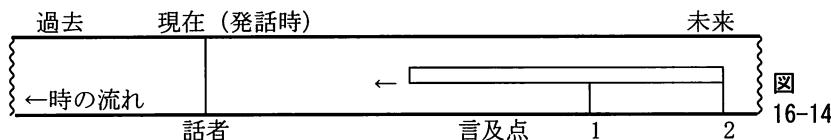
(着) ル (2回) <3回> (着) テイル (6回)

(着) タ (3回) <4回> (着) テイタ (7回)

アスペクト表現形式の発達した言語であれば、もっと多くの言語形式を準備し、それぞれの形式の役割をより細かく限定することであろう。

16.4 ⑦「存在的出来事（いる、ある等）」のテンスとアスペクト

a) 未来……出来事が未来に予定されている場合



言及点 1 ◎単なる未来 (12時に研究室に) いル

言及点 2 (未来完了) (未来の完了は表現できない^{*1}。)

言及点 2 (未来継続完了) (未来の完了は表現できない^{*1}。)

b) 現在……出来事が現在の場合



言及点 1 ◎単なる現在 (今、ここに) 川上さんがいル

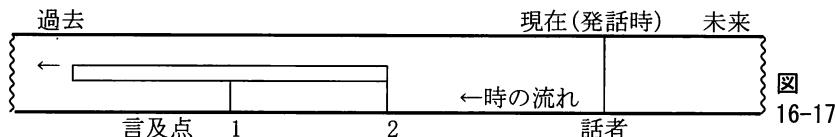


言及点 2 (現在完了) (今、ここに) 川上さんがいタ

言及点 2 (現在継続完了) (今まで、ここに) 川上さんがいタ

*1 16.3 a)注 参照。仮定条件は「最後までここにいたら(未来完了・条件)，ご褒美をあげます」

c) 過去……出来事が過去となった場合



言及点1 ◎単なる過去 (あのとき, あそこに) 川上さんがいタ

言及点2 (過去完了) (あのとき, あそこに) 川上さんがいタ

言及点2 (過去継続完了) (あのときまで, あそこに) 川上さんがいタ

「存在的な出来事」では「(い)ル」と「(い)タ」の2つの形式しかない。

(完了は存在そのものの完了ではない。13.7 c) 参照。)

d) まとめの表 ……以上のテンスとアスペクトの形式の関係を表に示す

表16-1

テンス	テンスとアスペクト	動き的出来事	存在的出来事
非 過 去	単なる未来	着ル	いル
	未来開始	着ル	
	未来進行(継続)	着テイル	
	未来完了		
	未来進行(継続)完了		
	未来結果状態継続	着テイル	
	未来結果状態完了		
	未来結果記憶	着テイル	
	単なる現在		いル
	現在開始(直近未来・過去)	着ル <small>(注) 着タ</small>	
現 在	現在進行(継続)	着テイル	
	現在完了	着タ	いタ
	現在進行(継続)完了	着ティタ	いタ
	現在結果状態継続	着テイル	
	現在結果状態完了	着ティタ	
	現在結果記憶	着テイル	
	単なる過去	着タ	いタ
	過去開始		
過 去	過去進行(継続)	着ティタ	
	過去完了	着タ	いタ
	過去進行(継続)完了	着ティタ	いタ
	過去結果状態継続	着ティタ	
	過去結果状態完了	着ティタ	
	過去結果記憶	着ティタ	

(注) 言及点7 (A4.4参照)

16.5 3種類の「現在」

上では「現在」を単に「現在」として扱ったが、実は「現在」と呼ばれる「時」には「絶対現在」「発話現在」「設定現在」の3種類が認められる。しかし、どの「現在」に対しても、上の図はそのまま適用できる。発話者はこれらの現在を巧みに組み合わせながら、効果的な発話をを行う。

a) 絶対現在

「絶対現在」は、正確な時計が刻々と告げる一瞬一瞬の新しい時刻その時を現在とするもので、すべての出来事が「絶対現在」において現実界に実現する。発話(記述を含む)も出来事の一つであるわけだから、発話が行為として行われるのは「絶対現在」においてである(図16-18)。

b) 発話現在

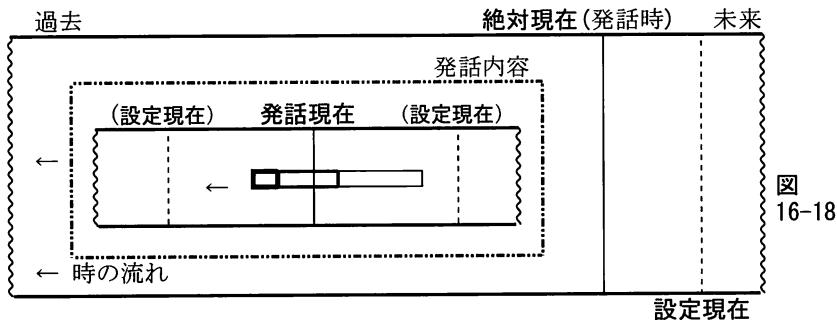
しかし、一度実現した出来事は、それが実現した瞬間に過去へと運ばれていく。発話も出来事であり、例外ではありえない。発話内容の中に例えば「今」というような語で固定された「現在」があったとしても、それはすぐに「絶対現在」としての「今」ではなくなってしまう。発話内容が「現在」というテンスをもち続けるのは、発話がなされた「時」そのものを「時の基準」として保持する限りにおいてである。このような、発話がなされた「時」を時の基準として保ち続ける現在は「発話現在」と呼んでしかるべき現在である。「発話現在」は時の流れとともに流れて行くが、同じ速さで流れて行く発話内容に対しては相対的に「現在」という基準であり続けることができる。(図16-18)

c) 設定現在

発話は出来事であるので、「絶対現在」において実現するのであるが、そのとき発話者は意図的に絶対現在とは別の現在を設定することがある。過去や未来のある一時点をあたかも絶対現在であるかのように表現する技法をする。このような場合には、その「現在」を「設定現在」と呼ぶのが適当である。(一般に「歴史的現在」と呼ばれている。)(図16-18)

ニュース番組は、ある出来事を報道する際に、スタジオでのアナウンサーによる説明に加え、録画ビデオを用いて分かりやすい報道を目ざす。その場合、アナウンサーによる発話が現在の認知点からのものだとすれば、ビデオは過去の認知点からのものである。ということはつまり、ビデオ内の画像・発話は設定現在と同じような効果をもつてことになる。

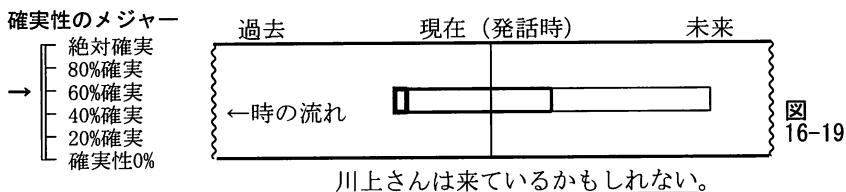
設定現在というのは、テレビカメラを過去や未来の一時点に据え付けて、そこで得られるアスペクトの舟の画像・発話を発話時点で中継放送するのに似ている。



16.6 確実性のメジャー

A 5章参照

未来の出来事は確実性が低いので「だろう」「かもしれない」などを伴うことが多い。しかし、これは未来に限ったことではない。話者にとっては、現在においても、過去においても不確実性はある。これも図示したい。確実性のメジャーを立てるというのはどうだろう。どの言語形式がどの程度の確実性を表しているのかをメジャー上に示すのである。(『発展A』のA 5章においては川の中に三筋の流れを設定し、体系的に扱うようになっている。)



確実性のメジャーの目盛り^{*1}

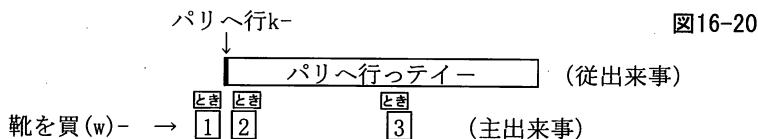
- 100%確実 来 (る／ている／た／ていた)
 90%確実 来 (る／ている／た／ていた)と思う
 80%確実 来 (る／ている／た／ていた)だろう
 70%確実 来 (る／ている／た／ていた)だろうと思う
 60%確実 来 (る／ている／た／ていた)かもしれない
 50%確実 来 (る／ている／た／ていた)か, [来ない] かわからない
 40%確実 来 (る／ている／た／ていた)かどうかわからない

16.7 複文

複文のテンスとアスペクト, 絶対テンス・相対テンスについては『発展A』のAIV部, AV部で詳しく扱っている。

「複文」には「主舟」の位置を「従舟」との位置関係で描こうとするものが多い。「複文」には主文と従属節があり, 従属節の中に従属文がある。主文の出来事を「主出来事」「主舟」, 従属文の出来事を「従出来事」「従舟」と呼ぶことにする。図示では従出来事を上に, 主出来事を下に描く(図16-20)。ここではよく引き合いに出される「パリへ行く」「靴を買う」の2つの出来事を「とき」でつないだ文で検討する。「とき」は従出来事が未来や過去に生起する場合に使用される。「行く」はここでは瞬間的出来事である。

a) 従属文のアスペクト



主出来事には3通りの位置があり, それぞれに番号がつけてある。主出来

*1 江副 (1985) pp. 156-159 による。

事のアスペクトにはここでは触れないものとする。従出来事のアスペクト形式は次の下線部のようになる。

- ① 主出来事が従出来事より前にある場合……-(r)u

パリへ行k-u とき 靴を買(w)-

- ② 主出来事が従出来事より後にある場合……タ

パリへ行つタ とき 靴を買(w)-

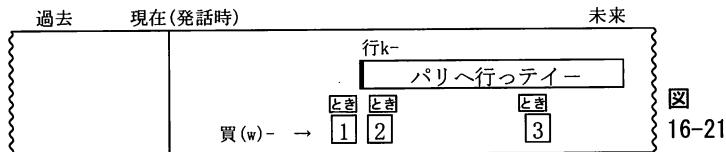
- ③ 主出来事が従出来事の期間中の一部・同時である場合……テイル

パリへ行つテイル とき 靴を買(w)-

b) 複文のテンスとアスペクト

図16-20が時間の流れの中に置かれるとテンスが主文属性（買(w)-）に現れる。

[未来]

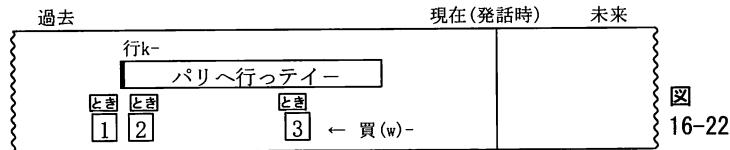


未 ① パリへ行k-u とき 靴を買(w)-u

未 ② パリへ行つタ とき 靴を買(w)-u

未 ③ パリへ行つテイル とき 靴を買(w)-u

[過去]



過 ① パリへ行k-u とき 靴を買つタ

過 ② パリへ行つタ とき 靴を買つタ

過 ③ パリへ行つテイル とき 靴を買つタ

「とき」を使用する場合は、従出来事(行k-)にも絶対テンスを適用することが多いので、次の文も可能となる。

未 [2] パリへ行k-u とき 靴を買(w)-u (下表 %)

過 [1] パリへ行つタ とき 靴を買つタ (下表 #)

過 [3] パリへ行つティタ とき 靴を買つタ (下表 \$)

「とき」のアスペクトの特性については『発展A』A11章で扱っている。

以上を表の形にまとめてみる。

(香港経由パリ行き) 表16-2

従 属 節	主文	購 買 地			パリへ 行つたか
		日本	香港	パリ	
パリへ行く	とき	買う	未回	未回	%未回
		買った	過回	過回	まだ 帰つて来た
パリへ行った	とき	買う		未回	まだ
		買った	#過回	#過回	過回 帰つて来た
パリへ行つている	とき	買う		未回	まだ
		買った		過回	過回 帰つて来た
パリへ行つていた	とき	買う	—	—	—
		買った		\$過回	帰つて来た

もう終わったのに「去年会つてゐる」と言うのはなぜ? → p. 118

「いひてゐる」と言わるのはなぜ? → p. 120

「着てゐる人」と「着た人」は同じ意味? → p. 127

「あ、ここにあつた」って、「た」で言うのはなぜ? → p. 130

「ステーキを食べつてゐる」は、繰り返しも表す? → p. 132

「米を食べてきた」は継続、「雪が降ってきた」は開始? → p. 138

テンス・アスペクトは川に浮かぶ舟で考えられる? → p. 142

「現在」って3種類ある? → p. 150

複文って、川に何そつかの舟が浮かんでいること? → p. 152

第17章

数字で表すテンスとアスペクト

17.1 図の統合

前章では別々に示していた動的出来事の現在・過去・未来の図(図16-6～-13)を統合して簡略化した図を作成し、これを図17-1とする(存在的出来事は扱わない)。

図17-1のような形で図の統合が可能となったのは、出来事を固定し、現在点(発話時点)の位置をいくとおりかに設定したからである。前章で作成した図では、現在点が固定され、出来事が移動していたのであるが、図17-1では固定されているのは出来事の方であり、したがって、現在点の方がいくつか設置され、発話時点が移動できるようにされた。

このいくつかの現在点を区別するために、その一つひとつに番号を与えることにする。図に見るとおり、00番～60番である。

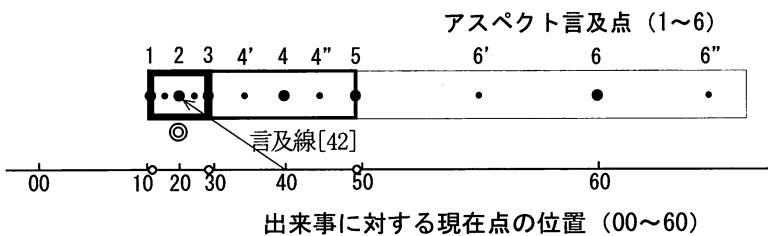


図17-1 現在点と言及点の位置関係(肯定)

- 言及点については、次の3点を補足しておきたい。
- ・言及点◎(マル)というのは、前章(16.3)(図16-6など)で「局面としてではな

く、出来事の成立そのものとして表現する場合」と述べていたところを記号に置き換えたものである。

- ・言及点6'は5と6の間にある。6"は6より後にある。同様に言及点4'は3と4の間に、4"は4と5の間にある。言及点2'は図では点でしか示されていないが、1と2の間に、同じく2"は2と3の間にある。(大小関係は、たとえば、 $5 < 6' < 6 < 6''$ のようになる。) それぞれの[']や["]の付いた補助的な数字が必要になるのは、現在点を20, 40, 60にとる場合である。
- ・言及点2, 4, 6は、現在点20, 40, 60にそれぞれ対応する点である。枠内の中間点である必要はなく、現在点の位置に応じて、その枠内のどの位置にあってもよい。また、点であるばかりではなく、幅をもつ場合もある。

なお、言及点0もあるが、これについては23.3①を参照。

また、言及点7もあるが、これについては『発展A』A4-4 参照。

17.2 位置関係を2桁の数字で表す

図では、現在点の位置を2桁で示し、言及点の位置を1桁で示してある。この両者を合計することによって位置関係を数字で表すためである。

たとえば、42というのは、40という時点を現在(発話時)として、アスペクト言及点2に言及することを意味している。この場合には、たとえば「読んでいた」という判断が導き出される。

現在点と言及点を結ぶ線を「言及線」(図17-1参照)と呼ぶことにし、これを[42]のように、数字を[]の中に入れることによって表示する。

このように数字(言及線)で位置関係を表すことには利点がある。たとえば、次のように「着物を着ている」という表現がいくつもある場合、どういう時間的位置関係にあるのか、その違いを、こまごました説明なしに明確に示すことができるからである。

[02] は「未来の進行」

自信がないの。10時ごろ着物を着ているから、様子を見に来てくれない。

[12] は「近い未来の進行」

じゃあ、この部屋で着物を着ているから、電話が終わったら来てね。

[22] は「現在の進行」

今着物を着ているから、ちょっと待ってて。

[22"] は「未来の進行(現在の進行の継続)」

5分後じや、まだ着物を着ているから、もうちょっと後にして。

[04/14/24/34] は「未来の状態」

午後は着物を着ているから、穴掘りなんかできないってば。

[06/16/26/36/46/56] は「未来の結果記憶」

来週は、もう着物を着ているから、ドレスにしよう。

[44] は「現在の状態」

着物を着ているから、あんまり食べられない。

[44"] は「未来の状態(現在の状態の継続)」

1時間後も、着物を着ているから、テニスはできない。

[66] は「現在の結果記憶」

先週もう着物を着ているから、今日はドレスにしよう。

[66"] は「未来の結果記憶」

次回の懇談会では、もう3回続けて着物を着ているから、ドレスにしよう。

このように単に「着物を着ている」というだけでも、[02]から[66"]まで、少なくとも18通りもの時間的位置関係がある。数字で表せば、どの位置関係であるのかが簡単に、かつ明確に特定できるわけである。

17.3 数字表記の特徴

ここで、この数字表記の特徴を見ておきたい。

① 未来 10位の数字 < 1位の数字

10位の数字が1位の数字より小さいときは未来を表す。言及線は、右肩上がりになる。テンスはル形になる。

[01] 未来開始(～すル)

[02] [12] [22"] 未来進行(～していル)

[04] [14] [24] [34] [44"] 未来結果状態継続(～していル)

[06] [16] [26] [36] [46] [56] [66"] 未来結果記憶(～していル)

[0◎] (ゼロマル) 未来出来事(～すル)

[03] [13] [23] [05] [15] [25] [35] [45] のように未来の完了を扱う時間関係は連体と仮想の場合にのみ可能となる^{*1} (16.3参照)。

② 現在 10位の数字 = 1位の数字

2桁とも同じ数字が並ぶ(’や”のついた補助的な数字は除く)。言及線は、垂線か垂線に近い線になる。

②-1 [現在] 2桁とも同じ「偶数」の数字が並ぶ。

言及線は垂線(=テンスはル形)になる。

[22] 現在進行^{*2} (～していル)

[44] 現在結果状態継続^{*2} (～していル)

[66] 現在結果記憶(～していル)

[2◎] (ニーマル, ニジュウ・マル) 現在出来事(～すル)

*1 ぞんざいな命令である「買った, 買った」「どいた, どいた」等は、直近未来における完了後の状態を要望しており、[04]と考えられる。(「買ってあれ, 買ったれ, 買つたり」の縮約、「どいてあれ, どいたり」の縮約。) p.131 注1参照

*2 「発見のタ」と言われる「あ, 着ていた」のようなものは、[22']や[44']である。これは「認知的完了」である(13.8, 及び A 3章参照)。

②-2 [直近未来・直近過去] 2桁とも同じ「奇数」の数字が並ぶ
言及線は垂線に近いものになる。

[11] 現在開始(直近未来)(～スル)

言及線は上方がやや右に傾いた線(=テンスはル形)になる。

[33] 現在完了・現在進行完了(直近過去)^{*1}(～しタ／してイタ)

言及線は上方がやや左に傾いた線(=テンスはタ形)になる。

[55] 現在結果状態完了(直近過去)(～してイタ)

言及線は上方がやや左に傾いた線(=テンスはタ形)になる。

図17-1において、現在点10の右に小さな白丸があるが、これは出来事の開始時その時を現在にして表現することができないことを意味している。10は、開始直前の時点である。(開始あるいは完了のように、事態の局面が質的に変化する瞬間その時は、現在時点としての言語表現をすることができない。)したがって、[11]のように同じ数字が並んでいても、これは厳密に言えば現在ではなく、直近未来である。

同様に、現在点30, 50は出来事の完了時その時ではなく、完了直後の時点である。[33][55]は、厳密に言えば現在ではなく、直近過去である。

③ 過去 10位の数字 > 1位の数字

10位の数字が1位の数字より大きいときは過去を表す。言及線は、左肩上がりになる。テンスはタ形になる。

[22'][32][42][52][62]過去進行(～してイタ)

[43][53][63]過去完了、過去進行完了(～しタ／してイタ)

[44'][54][64]過去結果状態継続(～してイタ)

*1 バスがまだ目の前に来ておらず、向こうに見えただけで「バスが来た」ということがある。これは一見非合理だが、「あそこへ」来ることについて述べているわけで、確かに完了である。「あそこへ」が省略されたものと考えれば理解できる。また、「タ」であるから「局面変化」ととらえることもできる(『発展A』A4章)。

[65] 過去結果状態完了(～していタ)

[66'] 過去結果記憶(～していタ)

[4◎][5◎][6◎] 過去出来事(～しタ)

[21][31][41][51][61]のように過去の開始を扱う時間関係は、連体と仮想の場合にのみ可能となる(16.3参照)。

学校文法の動詞活用形

動詞・態詞・助動詞には次のような諸形式がつく。学校文法では動詞とこれらを組み合わせて、「活用形」を作り出している。

形式の種類		形式	学校文法
属性詞	否定詞	- <u>(a)</u> na. k-	未然形
	使役態詞	- <u>(s)</u> as-	未然形
	受動態詞	- <u>(r)</u> ar-	未然形
	許容態詞	-e-	—
描写詞	実現見込み描写詞	- <u>(y)</u> oo	未然形
	非実現見込み描写詞	- <u>(u)</u> -mai	—
	実体修飾第2描写詞	- <u>(i)</u>	連用形
	連続描写詞	- <u>(i)</u>	連用形
	基本描写詞	- <u>(r)</u> u	終止形
	実体修飾第1描写詞	- <u>(r)</u> u	連体形
	条件描写詞	- <u>(r)</u> eba	仮定形
	命令描写詞	-e / -ro	命令形
	展開描写詞(基に)	-a(ba)	—

動詞と上表中の下線部とを組み合わせて学校文法の「活用形」ができる。連用形、終止形、連体形、命令形は一応妥当であるが、未然形、仮定形では形式を無意味に分割してしまっている。